

## 「線形代数学 B」 演習問題

1.  $U, W$  はベクトル空間  $V$  の部分空間とする.

- (1) 交わり  $U \cap W$  は  $V$  の部分空間であることを示せ.  
 (2) 和集合  $U \cup W$  は部分空間とは限らない. 反例を一つあげよ.

2.  $A = \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 \\ 1 & 2 & -1 & 3 \\ 2 & 1 & 1 & 3 \end{pmatrix}$  とする.  $\mathbb{R}^4$  の部分空間  $U = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^4 \mid A\mathbf{x} = \mathbf{0}\}$ ,  $W = \{A\mathbf{x} \in \mathbb{R}^3 \mid \mathbf{x} \in \mathbb{R}^4\}$  の次元と 1 組の基底を求めよ.

3.  $\mathbb{R}^3$  の原点  $O$  を通り, 方向ベクトル  $\mathbf{d} \neq \mathbf{0}$  の直線を  $\ell$  とする. 直線  $\ell$  に関する対称変換を  $f$  とする.

(1)  $f(\mathbf{x}) = \frac{2}{\|\mathbf{d}\|^2}(\mathbf{x}, \mathbf{d})\mathbf{d} - \mathbf{x}$  であることを示せ. ( $(\cdot, \cdot)$  は内積.)

(2) 1 は  $f$  (つまり  $f$  の表現行列  $A$  の) 固有値であり,  $\mathbf{d}$  は 1 に属する固有ベクトルであることを示せ.

(3)  $\mathbf{d} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  のとき, 線形変換  $f$  の標準基底に関する表現行列  $A$  を求めよ.

4. 標準基底に関して  $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 2 & 1 & 1 \\ -1 & 0 & \alpha \end{pmatrix}$  で表される  $\mathbb{R}^3$  の線形変換  $f$  を考える.

- (1)  $f$  が全単射でになる  $\alpha$  の条件を求めよ.  
 (2)  $f$  の像と核の次元を求めよ.

5.  $A = \begin{pmatrix} 0 & -1 & 1 \\ -1 & 0 & -1 \\ 1 & -1 & 0 \end{pmatrix}$  について, 1 次変換  $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$  を考える.

- (1)  $A$  の逆行列を求めよ.  
 (2) 曲面  $S: x^2 + y^2 + z^2 - xy - yz + zx - 2 = 0$  を  $f$  で変換した曲面  $f(S)$  の方程式を求めよ.  
 (3) 曲面  $S$  で囲まれる部分の体積を求めよ.

6.  $A = \begin{pmatrix} 3 & -2 & -3 \\ -3 & 2 & 3 \\ -2 & 2 & 2 \end{pmatrix}$  とし, 線形変換  $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$  ( $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^3$ ) を考える.

- (1) 平面  $H: ax + y + z = 0$  のベクトル表示を一つ求めよ.  
 (2)  $H$  を  $f$  で変換した図形が直線になるとき,  $a$  の値を求めよ.

7.  $\mathbb{R}^3$  のベクトル  $\mathbf{a} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{b} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{c} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{v} = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{w} = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}$  を考える.

(1)  $B = [\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}]$ ,  $C = [\mathbf{u}, \mathbf{v}, \mathbf{w}]$  はそれぞれ  $\mathbb{R}^3$  の基底であることを示せ.

(2)  $B$  から  $C$  への基底の変換行列を求めよ.

8. 次の行列  $A$  は対角化可能か.

(1)  $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix}$     (2)  $A = \begin{pmatrix} a & 1 & 0 \\ 0 & a & 0 \\ 0 & 1 & a \end{pmatrix}$

9.  $A = \begin{pmatrix} 1 & -2 \\ 1 & 4 \end{pmatrix}$

- (1)  $A$  の固有値と固有ベクトルを求めよ.  
 (2)  $A^n$  を求めよ.

10.  $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & 3 \end{pmatrix}$

- (1)  $A$  は対角化できないことを示せ.  
 (2)  $A$  を三角化せよ. (Hint:  $N = A - \lambda E$  ( $\lambda$  は  $A$  の固有値) とおき,  $N\mathbf{v} \neq \mathbf{0}$  となる  $\mathbf{v}$  を一つとり  $P = (N\mathbf{v}, \mathbf{v})$  とする.)

11. 次の実対称行列を直交行列で対角化せよ.

(1)  $\begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 3 & 1 \end{pmatrix}$     (2)  $\begin{pmatrix} 1 & -1 & 1 \\ -1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$

12.  $\lambda$  は正則行列  $A$  の固有値とする.

- (1)  $\lambda \neq 0$  であることを示せ.  
 (2)  $1/\lambda$  は  $A^{-1}$  の固有値であることを示せ.

13. ある  $k \geq 1$  について  $A^k = O$  とする. (このような行列  $A$  をべき零行列という.) 以下を示せ.

- (1)  $A$  の固有値はすべて 0.  
 (2)  $A \neq O$  ならば  $A$  は対角化不可能.

14.  $n$  次正方行列  $A$  が  $A^{n-1} \neq O$  かつ  $A^n = O$  をみたす

とする. このとき,  $A$  は  $N = \begin{pmatrix} 0 & 1 & & O \\ & 0 & \ddots & \\ & & \ddots & 1 \\ O & & & 0 \end{pmatrix}$  に

共役であることを示せ. (Hint:  $A^{n-1}\mathbf{v} \neq \mathbf{0}$  となる  $\mathbf{v}$  をとり,  $P = (A^{n-1}\mathbf{v}, A^{n-2}\mathbf{v}, \dots, \mathbf{v})$  を考える.)

15.  $xy$  平面上の曲線  $C: 5x^2 - 6xy + 5y^2 = 8$  を考える.

- (1) 2 次形式  $q(x, y) = 5x^2 - 6xy + 5y^2$  を標準化せよ.  
 (2) 曲線  $C$  の概形を図示せよ.

16.  $A$  は  $n$  次実対称行列とし,  $f(\mathbf{x}) = (\mathbf{x}, A\mathbf{x})$ ,  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$  とおく.  $f(\mathbf{x}) > 0$  ( $\mathbf{x} \neq \mathbf{0}$ ) となる必要十分条件は  $A$  のすべての固有値が正であることを示せ. (このような対称行列を正定値行列という.)

17. 実対称行列  $A$  について,  $A \neq O$  ならば  $A^n \neq O$  ( $n \geq 1$ ) であることを示せ.

解答の概略. (詳細は各自で補うこと)

1. (1) 略.

(2)  $V = \mathbb{R}^2$  とし,  $U = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ 0 \end{pmatrix} \mid x \in \mathbb{R} \right\}$ ,  $W = \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ y \end{pmatrix} \mid y \in \mathbb{R} \right\}$  とする. このとき,  $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \in U$ ,  $\mathbf{y} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \in W$  であるが,  $\mathbf{x} + \mathbf{y} \notin U \cup W$  であるので  $U \cup W$  は部分空間でない.

2. 掃き出し法で  $A$  を階段行列に直すと  $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & -1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  になる. 従って  $\dim W = 2$  で  $W$  の基底として  $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  がとれる.

$A\mathbf{x} = \mathbf{0}$  の解は  $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ .

従って  $U$  の基底は  $\begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  で次元は 2.

3. (1)  $\mathbf{u} = \frac{\mathbf{d}}{\|\mathbf{d}\|}$  は大きさ 1 の単位ベクトルである.  $\mathbf{x}$  を  $l$  に射影したベクトルは  $(\mathbf{x}, \mathbf{u})\mathbf{u}$  である. このとき,  $\mathbf{x} + f(\mathbf{x}) = 2(\mathbf{x}, \mathbf{u})\mathbf{u}$  となる. この式を  $\mathbf{d}$  で表すと示したい式になる.

(2)  $\mathbf{d}$  は  $l$  上にあるので明らかに  $f(\mathbf{d}) = \mathbf{d}$  つまり  $A\mathbf{d} = \mathbf{d}$  である. これは 1 が固有値で  $\mathbf{d}$  が固有ベクトルであることを意味する.

(3) 成分計算すると  $f(\mathbf{x}) = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} -2 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$

より

$$A = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} -2 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix}$$

4. (1)  $f$  全単射  $\iff A$  正則 なので  $|A| = -\alpha + 1 \neq 0$ . 故に  $\alpha \neq 1$ .

(2)  $\alpha \neq 1$  のとき,  $f$  は全単射なので  $\dim \text{Ker } f = 0$ ,  $\dim \text{Im } f = 3$ .

$\alpha = 1$  のとき, 掃き出し法により  $\text{rank } A = 2$  であるので  $\dim \text{Ker } f = 1$ ,  $\dim \text{Im } f = 2$ .

5. (1) 掃き出し法により  $A^{-1} = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & -1 & 1 \\ 1 & -1 & -1 \\ -1 & -1 & -1 \end{pmatrix}$ .

(2)  $\mathbf{x}' = A\mathbf{x}$  とすると  $\mathbf{x} = A^{-1}\mathbf{x}'$ . この成分を式に代入して計算すると答  $x^2 + y^2 + z^2 = 4$  を得る.

(3)  $f$  により体積は  $|\det A| = 2$  倍になる.  $f(S) : x^2 + y^2 + z^2 = 4$  で囲まれる部分の体積は  $\frac{32}{3}\pi$  より求める体積は  $\frac{16}{3}\pi$ .

6. (1) 法線ベクトルに垂直な 1 次独立なベクトル  $\mathbf{v}, \mathbf{w}$

をとる. 例えば  $\mathbf{v} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{w} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -a \end{pmatrix}$  がとれる.

このとき,  $H : \mathbf{x} = t\mathbf{v} + s\mathbf{w}$  である.

(2)  $f(H) : f(\mathbf{x}) = tf(\mathbf{v}) + sf(\mathbf{w})$  であるから,  $f(\mathbf{v}) = \begin{pmatrix} -5 \\ 5 \\ 4 \end{pmatrix}$ ,  $f(\mathbf{w}) = \begin{pmatrix} 3 - 3a \\ -3 + 3a \\ -2 + 2a \end{pmatrix}$  が 1 次従属であれば  $f(H)$  は直線になる. 1 次従属になる  $a$  を求めると  $a = 1$  である.

7. (1)  $|\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}| = 2 \neq 0$ ,  $|\mathbf{u}, \mathbf{v}, \mathbf{w}| = -1 \neq 0$ . これらは次元に等しい個数からなる 1 次独立なベクトルの組であるので基底である.

(2) 基底の変換行列を  $A$  とすると,  $(\mathbf{u}, \mathbf{v}, \mathbf{w}) = (\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c})A$  であるので  $A = (\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c})^{-1}(\mathbf{u}, \mathbf{v}, \mathbf{w}) = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 1 & 0 & -1 \\ -1 & -2 & -1 \end{pmatrix}$ .

8. (1) 固有値は 2, 1, 0 で相異なるので対角化可能.

(2) 固有値は  $a$  のみ (重複度 3) で 1 次独立な固有ベクトルは 2 つしかとれないので対角化不可能.

(別解; 固有値は  $a$  のみ (重複度 3). 対角化可能なら  $P^{-1}AP = aE$  となるが, このとき  $A = aE$  となり矛盾.)

9. (1) 固有値は 3, 2 で固有ベクトルはそれぞれ  $\begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ ,  $\begin{pmatrix} -2 \\ 1 \end{pmatrix}$  がとれる.  $P = \begin{pmatrix} -1 & -2 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}$  と

おくと,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$  となるので  $A^n = P \begin{pmatrix} 3^n & 0 \\ 0 & 2^n \end{pmatrix} P^{-1} = \begin{pmatrix} 2^{n+1} - 3^n & 2^{n+1} - 2 \cdot 3^n \\ -2^n + 3^n & -2^n + 2 \cdot 3^n \end{pmatrix}$ .

10. (1) 固有値は 2 のみ (重複度 2). 1 次独立な固有ベクトルは 1 つしかとれないので対角化不可能.

(2)  $N = A - 2E = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$ .  $\mathbf{v} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  とおくと,  $N\mathbf{v} = \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \end{pmatrix}$ .  $P = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix}$  とおくと  $P^{-1} = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$  で  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$ .

11. (1) 固有値 4, -2, 固有ベクトル  $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ . これらは直交するので大きさを 1 にして正規直交基は  $\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ . このとき  $P = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$  は直交行列で  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 4 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix}$ .

- (2) 固有値は 2 (重複度 2) と -1 である. 2 に属する 1 次独立な固有ベクトルは  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  がとれる. -1 に属する固有ベクトルは  $\begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}$  がとれる.

これら正規直交化すると  $\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \frac{1}{\sqrt{6}} \begin{pmatrix} -1 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}, \frac{1}{\sqrt{3}} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  となる.

$P = \begin{pmatrix} 1/\sqrt{2} & -1/\sqrt{6} & -1/\sqrt{3} \\ 0 & 2/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} \\ 1/\sqrt{2} & 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} \end{pmatrix}$  とおくと直交行列で  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 2 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$ .

12. (1)  $|A| = \prod_{i=1}^n \lambda_i \neq 0$  より固有値は 0 でない.  
 (2)  $A\mathbf{v} = \lambda\mathbf{v}$  より,  $A^{-1}\mathbf{v} = \frac{1}{\lambda}\mathbf{v}$ . これは  $\frac{1}{\lambda}$  が  $A^{-1}$  の固有値であることを示す.

13. (1) フロベニウスの定理より  $\lambda^k = 0$ . 故に  $\lambda = 0$ .

(2) 対角化可能とすると固有値が 0 のみなので  $P^{-1}AP = O$  ととなるが, このとき  $A = O$  となり矛盾.

14. Hint のように  $\mathbf{v}$  をとる.  $\{A^{n-1}\mathbf{v}, \dots, A\mathbf{v}, \mathbf{v}\}$  は 1 次独立である. 従って  $P$  は正則.

( $\because$ )  $c_{n-1}A^{n-1} + \dots + c_1A\mathbf{v} + c_0\mathbf{v} = \mathbf{0}$  とする. 両辺に  $A^{n-1}$  を施すと,  $c_0A^{n-1}\mathbf{v} = \mathbf{0}$  となるので  $c_0 = 0$ . このとき  $c_{n-1}A^{n-1} + \dots + c_1A\mathbf{v} = \mathbf{0}$  となるが  $A^{n-2}$  を施すと  $c_1 = 0$  がわかる. 以下同様にして  $c_i = 0$  がいえる.

$A(A^{n-1}\mathbf{v}) = \mathbf{0}, A(A^{n-2}\mathbf{v}) = A^{n-1}\mathbf{v}, \dots, A\mathbf{v} = A\mathbf{v}$  より

$$A(A^{n-1}\mathbf{v}, \dots, \mathbf{v}) = (A^{n-1}\mathbf{v}, \dots, \mathbf{v})N.$$

故に  $AP = PN$  となる.  $P^{-1}AP = N$  なので  $A, N$  は共役.

15. (1)  $q$  の係数行列は  $A = \begin{pmatrix} 5 & -3 \\ -3 & 5 \end{pmatrix}$ .  $A$  の固有値は 8, 2 でそれぞれの固有ベクトルを正規直交化すると例えば  $\mathbf{u}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}, \mathbf{u}_2 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  が得られる. このとき,  $P = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}$  は回転行列となっていて,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 8 & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$  である. 以上より  $q = 8x^2 + 2y^2$ .

(2) 線形変換  $f: \mathbf{x}' = P^{-1}\mathbf{x} = {}^tP\mathbf{x}$  で  $C$  を変換すると  $f(C): x^2 + \frac{y^2}{4} = 1$  (楕円) となるから  $C$  は  $f(C)$  を  $P$  で変換しても, すなわち,  $f(C)$  を  $-\frac{\pi}{4}$  回転した曲線になる. (図は省略)

16.  $A$  の固有値を  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  とする.  $A$  を直交行列  $P$  で対角化すると  $P^{-1}AP = D$  ( $D$  は  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  を対角成分にもつ対角行列).  $\mathbf{y} = {}^tP\mathbf{x}$  とおくと

$$f(\mathbf{x}) = (\mathbf{x}, PDP^{-1}\mathbf{x}) = ({}^tP\mathbf{x}, D{}^tP\mathbf{x}) = (\mathbf{y}, D\mathbf{y}) = \lambda_1 y_1^2 + \dots + \lambda_n y_n^2 \text{ となる.}$$

これより  $f(\mathbf{x}) > 0$  ( $\mathbf{x} \neq \mathbf{0}$ )  $\iff \lambda_i > 0$  ( $1 \leq i \leq n$ ).

17. 対偶を示す.  $A$  は対角化可能なので  $P^{-1}AP = D$  (対角行列) とすると,  $P^{-1}A^n P = D^n$ . ここで  $A^n = O$  ならば  $D^n = O$  となり  $D$  の固有値は 0 のみとなる. このとき  $D = O$  となるので  $A = PDP^{-1}$  より  $A = O$  となる.